

地域のセーフティネットとしてのアーティスト・ワークショップ

学校や施設ではない

もうひとつの

居場所づくり

特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

# ABOUT

このプロジェクトは、  
 様々な環境で暮らす子どもたちが、アーティスト・ワークショップを通して交流する場をつくることで、  
 子どもたちへの支援の拡充や、彼らの地域社会への参加や自立が促されるとともに、  
 人と人のつながりが強化された地域・社会になることを目指して始めました。

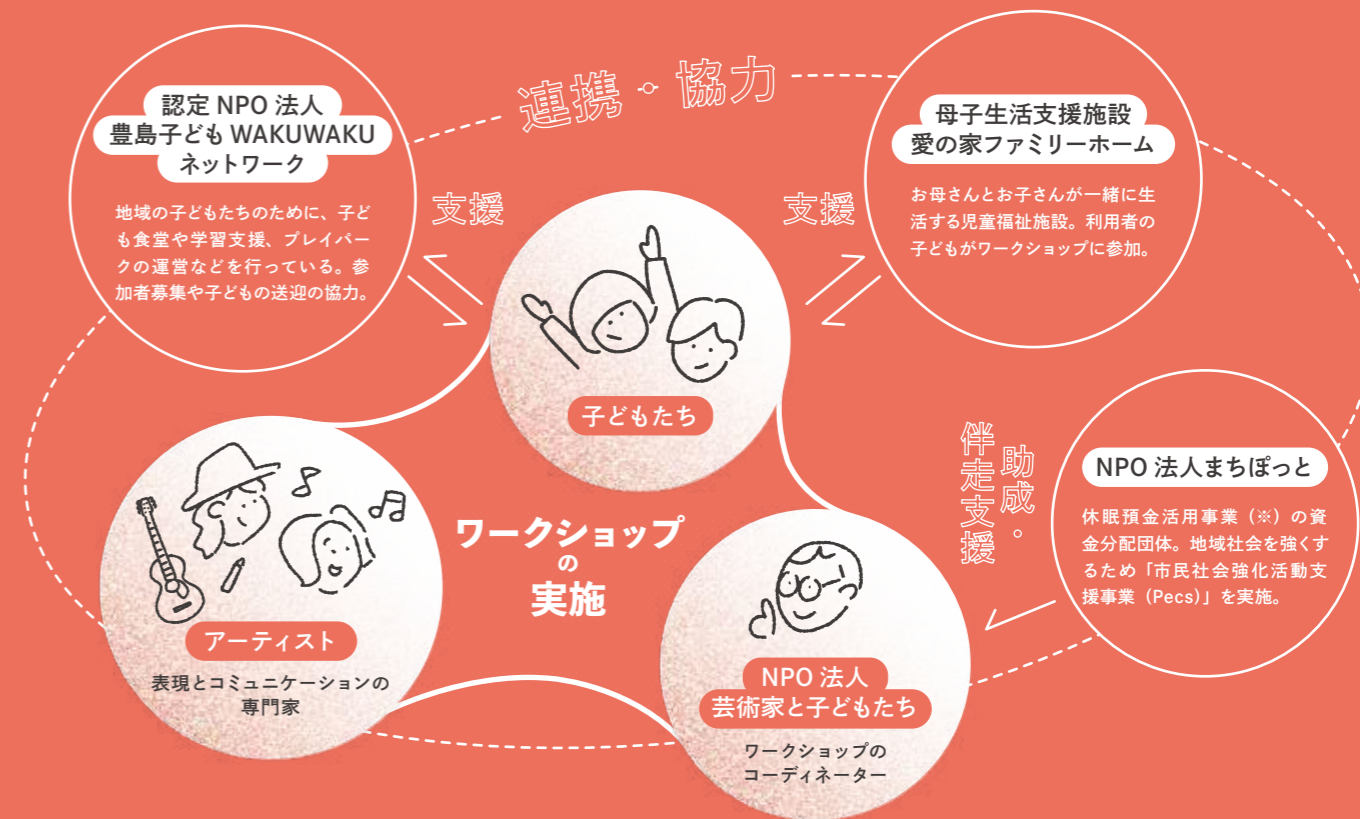


児童福祉施設で暮らす子どもたちや、地域の子ども食堂等に参加する子どもたちなど、様々な環境で生きづらさを抱える子どもたち

子どもたちが文化芸術に親しみ、感動する心や自他の表現を認める心を育みながら、多様な価値観、表現との出会い、人と人のつながりを生む場をつくる

当事者同士、関係施設や団体、連携機関などのつながりが強化された、豊かな地域社会になる

# 3年間で生まれたつながり



※休眠預金活用事業について 「民間公益活動を促進するための休眠預金等に係る資金の活用に関する法律」(休眠預金等活用法)に基づき、2019年度から始まった制度。 <https://www.janpia.or.jp/kyumin/>

# BACKGROUND

## #1

### なぜ今回の子どもたちを対象に事業を始めようと思ったか

この事業は、休眠預金活用事業の資金分配団体である NPO 法人まちぼっとの助成事業「市民社会強化活動支援事業 (Pecs)」の実行団体に当 NPO が採択されて、2020～2022 年度の 3 年間実施しました。

元々は、東京都内において、児童養護施設に暮らす子どもたちや、子ども食堂等、地域の子どもの居場所を利用する子どもたちが、アーティスト・ワークショップを通して交流し、当事者同士や、関係施設や団体、連携機関等のつながりを強化すること。そして、多様な困難を抱えた子どもたちへの支援が拡充されるとともに、彼らの地域社会への参加や自立が促されることで、人と人の支えあいが必要な地域・社会になると考えてスタートしました。

しかし、2020 年度の活動スタート時点で、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、児童養護施設での実施が難しくなりました。そこで、NPO 法人まちぼっからの助言を受けながら、私たちと同じく豊島区内で様々な形で子ども支援を続けている認定 NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワークと連携して、豊島区内の子どもたちとのワークショップから始めることになりました。

当時、子ども食堂もコロナの影響で通常の運営が難しい時期でしたが、演劇など表現活動に興味がある子どもたちを区内の集会室に集める形でワークショップがスタート。そこから、ひとり親家庭や、外国にルーツを持つ子どもたち、そして母子生活支援施設で暮らす子どもたちなどとの出会いにつながっていきました。

## #2

### 子どもたちをめぐる課題

芸術家と子どもたちでは、2010 年度から児童養護施設等、児童福祉施設での活動を続けています。児童養護施設では、年々被虐待経験や障害のある子どもたちの割合が増加していて、そうした子どもたちの支援の拡充が求められていることを、ワークショップを通して実感してきました。

一方で、地域で暮らす他の子どもたちの中にも、生きづらさを抱えて何らかの支援が必要ではないか、と思われる子がいることに気づき始めました。家庭での子育てが難しい社会の現状があり、親の経済的貧困が子どもから学習や体験の機会を奪い、教育機会に恵まれなかった子どもたちが低学力低学歴となり所得の低い職業につかざるを得なくなり、貧困の連鎖が生じているということも考えられます。

また、虐待を受けて社会的養護のニーズがある子どもたちのうち、施設に入所できるのはごくわずかであり（児童相談所の児童虐待相談対応件数のうち、施設入所とな

る子どもは 3%に満たない）、虐待等によって苦しい生活を余儀なくされている要保護・要支援児童の多くは地域で暮らし、市区町村の在宅支援の対象となっていることが伺えます。

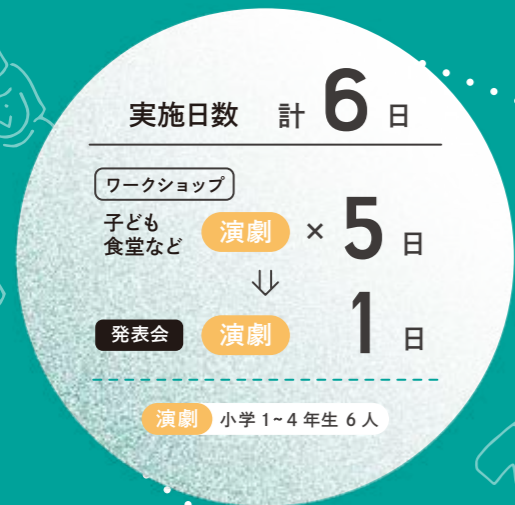
そして、地域の NPO や住民により、「子ども食堂」など食事や学習支援、遊び場にもなるような多様な居場所がつくれ、そのネットワークづくりも、草の根的に進められています。困難を抱える子どもたちを、複数の機関が連携・協力しながら地域で育てられるような取り組みが広がっていますが、子どもたちや地域の実態は様々であり、当事者に寄り添う草の根レベルの活動が果たす役割は依然として大きく、創造性を育む継続的な新しい支援が必要ではないかと考えています。

そこで、演劇やダンス、音楽といった表現活動を通じた交流から、当事者同士が多様な価値観を知り、地域とのつながりを感じられる場を増やすために、事業を展開してきました。

# 3年間の実施データ

2020 **1** 年目

当事者が参加する  
継続的な  
ワークショップの実施



2021 **2** 年目

施設や団体間で  
連携を強化



2022 **3** 年目

成果発表会と  
効果の周知

ワークショップでは、子どもたちが演劇やダンス、音楽など様々な表現活動を通して、自己表現や、他者とのコミュニケーションを楽しみながら、とものつくり出す経験を大切にしてきました。各年度の最終回には、保護者や日頃子どもたちの支援に携わる方々を招いて、発表会を設けました。発表会も回数を重ねることで、子どもたちの変化を多くの大人に見守ってもらうことができ、発表後には、子どもたちから観客に感想を求める姿が見られるようになりました。地域の中で暮らす子どもたちの育ちを支え、あたたかく見守る支援の輪が広がったことを感じました。

# ワークショップに参加した子どもたちと大人たち



いちばん表現をつめこんだ  
オリジナルの劇づくり

## 演劇 グループ

メインアーティスト / アシスタント・アーティスト  
渡辺麻依 / 佐藤円・金子由菜

豊島区内の小学生を中心に、本事業の1年目から始まったグループ。ひとり親家庭の子どもなど、WAKUWAKU ネットワークとつながりのある家庭の子どもたちで、演劇などに興味のある子どもたちを募りました。特別支援学級に在籍する子ども含め、3年間継続して参加した子どもいれば、年度ごとに新しいメンバーが少しずつ増えていきました。

巨大な竜が登場

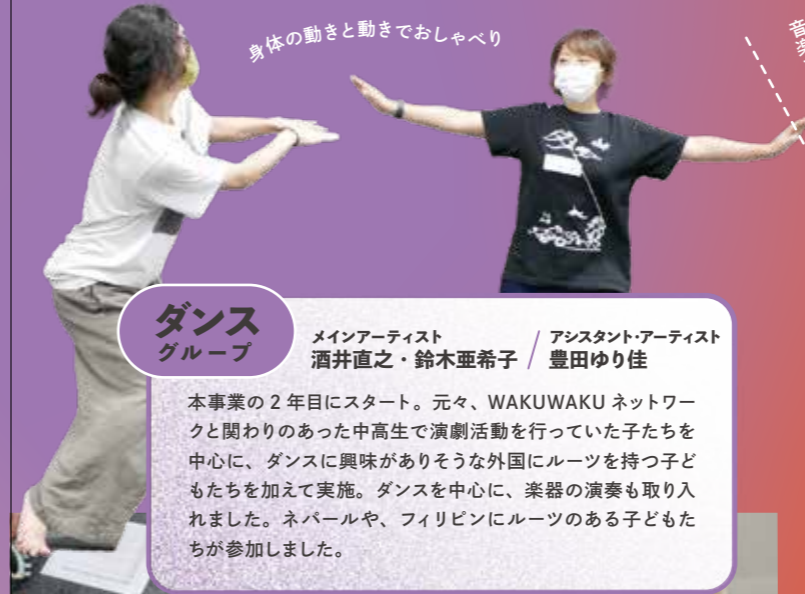
身体の動きと動きでおしゃべり

いろいろな楽器にふれて  
音楽をしくみの

## ダンス グループ

メインアーティスト / アシスタント・アーティスト  
酒井直之・鈴木亜希子 / 豊田ゆり佳

本事業の2年目にスタート。元々、WAKUWAKU ネットワークと関わりのあった中高生で演劇活動を行っていた子たちを中心に、ダンスに興味がありそうな外国にルーツを持つ子どもたちを加えて実施。ダンスを中心に、楽器の演奏も取り入れました。ネパールや、フィリピンにルーツのある子どもたちが参加しました。



## 音楽 グループ

メインアーティスト 中村大史

本事業の2年目にスタートしたグループ。母子生活支援施設を利用する家庭の子どもたちで、音楽に興味がある姉妹を対象に実施。環境音に耳を澄ませるサウンドスケープや、アイルランド音楽に使われる楽器の演奏などを体験しました。



# 3年間を振り返って

3年目の発表会が終わった後、子どもたちと私たちをつないでくださった関係者の方々と、アーティスト、アシスタントの皆さんとで、事業評価を兼ねた振り返りの場を設けました。子どもたちの変化や、アーティスト自身の変化、地域でこうした場があることの意味や可能性などを伺いました。



認定 NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク

愛の家ファミリーホーム  
(母子生活支援施設)

アーティスト



栗林知絵子



石平晃子



小川景也



渡辺麻依  
(演出家・俳優)



酒井直之  
(振付家・ダンサー)



中村大史  
(音楽家・作曲家)



全文は、当NPOの  
WEBサイトに  
コラム記事として掲載

アシスタント・アーティスト

NPO 法人まちぼと

NPO 法人芸術家と子どもたち



佐藤円  
(俳優)



金子由菜  
(俳優)



豊田ゆり佳  
(ダンサー)



小林幸治



金和代



堤康彦



中西麻友

ー参加した子どもたちやそれぞれのご家庭、その他の活動と関連して、今回のプロジェクトが何か変化や影響をもたらしたことはありましたか。



栗林

演劇チームの子どもたちが、毎回参加するための準備が一番大変なところなのですが、3年間通じて、親御さんがこういうところに子どもを連れて来ることができなくても、地域の誰かが連絡し合っつなぐことで、いろんな機会をつくっていけるなあということを感じました。

アーティストに出会う機会が無い子どもたちも、この体験が原体験になって、ずっとこれからも、何かを頑張る原動力になるんじゃないかな、と思っています。今後も子どもたちに、こうした課題解決のために活動を継続して欲しいなと思いますが、休眠預金の助成期間は3年間で終わってしまう。でも、この成果をちゃんと伝えて、子ども家庭庁ができるこの機会に、子どもたちが文化に出会うということが、豊島区だけではなく、全国のアーティストが関わられるようにするにはどうしたらいいのか、私も考えていきたいと思っています。



石平

私は主に、ダンスチームのネパールの子を引率していますが、日本語がまだまだな子が多いので、言っていることが100%伝わらない中で、やりたい気持ちがあっても連絡が上手くつかないところがあって大変なこともありました。でも、別の国から来て、なかなか自分の居場

所がない子たちも、自分を出して良い場所とか、自分を受け止めてくれて、一緒に過ごしてくれるアーティストの方と出会えたということは、すごく大きなことだと思いました。

だいたいの子が、親御さんが文化的なことに何か参加させようという感じではなかったり、外国籍の方だったりするとそもそも情報を取りに行くことが大変なので、彼女彼らの経験の扉が、ここに参加することによって開かせてもらったんじゃないかなと。



小川

参加した子は、元から音楽に興味があるお子さんたちでしたが、以前にも増して新しい楽器を覚えたいと明るい希望がいっぱい出てくるようになりました。練習の最後が10月の始めだったので、そこもドキドキして「今日(11月下旬の発表日)はちょっと早く行きましょう」とずっと言っているくらいでした。たくさんのお子さんたちと今日初めて会って、合わせて一つのものをつくったという経験は、成長の一つとして、貴重な経験をさせていただいたなと思います。

ーアーティストから見て、子どもたちの変化や、学校や公募のワークショップなどと比べて今回のような場で感じることはありますか。



渡辺

1年目の最初は、自分に対してのショックを受けました。「どうしたら、この時間を上手く使えるようになるんだろう、どうしよう」というショックだったんですけど、やり方を変えたんですね、きっと。学校とかでやっていたのとは違うやり方で、あの子たちと一緒に楽しめるにはどうし

たら良いか、ということを考えてやれるようにしたから、そうしたらやっぱり自分も楽しくなるし、(アーティストとして)やりたいことはもちろんあるけれど、あまりガチガチに固めずに、その場で一緒につくっていくという感じでしょうか。



酒井

学校とかいろんな場所で決められたことをやることはあるから、ここではそうじゃない時間を持てたらとか、ここに来ることが楽しいと思えることがまず必要だなあと、振付やタスク系のことはほとんどやっていない。やりたいものがある人はやるし、こっちからちょっと遊びの延長のような踊りを提案したりするくらい。

でも途中から演劇チームと合流して、それはすごい良かったなと思います。やっぱり演劇には物語があるし、子どもたちもいつもよりちょっと良い緊張感が入るというか、交流もすごくしていた。国が違うのもあるし、そこがクロスする時間がとても良かったなと思います。



石平

普段は、学校とか親とかから、怒られないようにすることが多いと思うけれど、ここで、子どもたちの力を信じてくれているってことはすごい伝わっていると思います。何だかんだ来て、何だかんだやっているのは、自分を大事にもらっている感じをすごく受けているんだと思います。



中村

発表の場で披露するという形なのは間違いないんですけど、それに至るワークショップを重ねる中ではあまりそれに向かわずワークショップを行っていました。伏線は張りつつですけど、初回は楽器を車に積めるだけ持ってきて、いろんな音を直接聞いてみたり、楽器に触らずに一分間目を閉じて今聞こえる音を聞いてみることを毎回欠かさずやったり、脈絡なくピアノをちょっと分解して調律を体験してみたり、あの手この手でワークショップを重ねてみました。それを経て、3人で信頼関係をゆっくりゆっくり築くことができました。



金子

音楽は、ダンスもそうだが言葉を使わないので、人種は関係ない。竜のシーンで、ネパールの子たちも演奏してくれてましたが、ちゃんと空気を読んでいるんですね。雰囲気を出さず場面で、場の雰囲気のイメージを自分でちゃんと持って、「ここは鳴らさなきゃ」「ここは控えて」と音の上げ下げをちゃんと感じています。人種も歳も関係なく、一堂に会せる良い機会だったなと思います。



佐藤

やっぱり3年目というのは、子どもたちが積み重ねてきたものがすごく顕著に表れることを感じています。練習の中で「こうしてみよう」「こうしたら面白いんじゃないかな」ということを、僕らは制約をしないで、子どもたちは好きなだけやってみました。台詞を思いついたら言ったら良いし、音を出したかったら出したら良いし、そのまま本番の

舞台に乗ったなという感じがします。



豊田

ライトが当たっている時はちゃんと自分が出ている感覚があって、袖にいる時は引っ込んでいる感覚があって、すごいなあと思いました。なんでそれができるんだろう、ということ考えた時に、やっぱり「みんなできっている」という意識が一人ひとりあるのかな、それが良いなと思いました。個人的には、最後の(観客から)感想を聞く質問タイムがとても良くて、(子どもからの)指名制で(観客に)一人ずつ聞いていくのは良いなと思いました。

**—資金分配団体として伴走支援をしての感想や、これからへのメッセージをお願いします。**



金

ワークショップを通じて、家族と学校以外でも大人と、大人に限らなくても良いんですけど他の人たちとふれあう機会が一つでも多いと、何かあった時に頼れる人と場所の選択肢が一つ増えるんだな、ということも改めて感じながら見させてもらいました。



小林

今日のお話の中で、一つは、子どもたちの変化を感じています。家族の方の変化を聞いたのもすごい成果だと思います。もう一つ、アーティストの方々がワークショップをやる中で変化してきたことも、とても大きな

ことだなと思います。これを上手く表現できると、その必要性が分かりやすく伝えられる材料になって、多くの人に共感してもらって「必要だね」と言ってもらえるのではないかと思います。休眠預金は残念ながら3年間の支援で終わってしまうのが、ぜひ続けていただきたいです。



## 点と点がつながる先へ

渡辺麻依（演出家・俳優）

あの子たち、今頃何をやってるのかなあ。今日は何をして遊んだのかなあ。

この3年間、そんな風にふと思い出して気になるあの子たち。

初めてのワークショップを終えた日には、「私に何ができるんだろう」と落ち込んだのを覚えています。

子どもたちと一緒にこれからどんな時間を過ごしていくのか、3年前は全く想像できませんでした。

記憶を辿りながら、ほんの一部ですが、これまでのワークショップの風景と子どもたちの変化をお伝えします。

1年目は、ワークショップの最初に「集合〜！」と声をかけても、集まるのは2、3人くらい。まず、全員で輪をつかって挨拶することが難しかったなあと思い出しました。遊びでも、演劇的なことでもいい、みんなで一つのことをやりたいと思うのだけど、なかなか上手いきませんでした。だから、2回目のワークショップに来てくれるかとても不安だったし、もう来てくれないんじゃないかとも思いました。それでもみんなが割と休まずに参加してくれて、1年目の最終日は、初回ワークショップの時には想像もできなかったような発表をしてくれました。みんながまさに、一つのことをやっている、しかもそれぞれ緊張しながらも楽しそうな瞬間があるように思う時間でした。発表後、嬉しそうにお客さんの感想を聞いたり、達成感のある表情で自ら感想を言ってくれたのも、自分はここを頑張ったんだ！と誇れることがあったからではない

でしょうか。ワークショップを重ねて発表が近づくにつれて、子どもたちが「ここは協力していこうよ」みたいなものを共有していたようにも思いました。

2年目は、新しいメンバーも加わることで、初年度メンバーは「ちょっと先輩」みたいな感じになっていました。前年度とワークショップの会場が違う（畳ではない）こともあってか、椅子に長く座って、こちらが考えている物語をよく聞いてくれて、手を挙げて質問もしたりして。子どもたちが来ているモチベーションは様々だと思うのですが、演劇をやり集まっているんだよね、という気持ちがうっすら見えていました。1年目は台詞を言いたくなかった子が堂々とクジラ役を演じていたり、発表直前にトイレから出て来なかった子が大きく絵を描いたり台詞を言ったり！1年目には無かった、子ど



もたちだけの台詞のあるシーンも見事にやってくれて、演劇を楽しんでいる姿と、お客さんを楽しませようとする姿がありました。5年生の男の子は、「カレーづくりのシーンで茶色の布を振ったら？」と提案してくれて、「私もそれをやりたいと思っていたんだよ！」と、嬉しくなりました。具体的に「料理する動作」ではない、そういう表現の仕方が出てくるのは、2年目だからかなと。

3年目。実は、1年目の初回ワークショップで挑戦したけれど、全然できなかった遊びをしました。ジャンベという太鼓に合わせて止まって動く、というルールがある鬼ごっこ。しかも、ジャンベを叩くのは6年生の子。緩急をつけたりリズムで、鬼がタッチしそうなタイミングで上手く音を止めている！おもしろい身体の形で止まってる子もいる！これは発表の時にどこかでやりたい、と思いました。新しい演劇メンバーとも、ダンスチームとも、自然と関わり合っていて、発表ではみんな頼もしいほどでした。2年目のような、台詞を大人がリードしていくところをなるべくつくらずに、子どもたちだけでシーンをつないでいけると良いなと思っていたのですが、演劇・ダンス・音楽が合体した発表の場で見事にそれをやっていた子どもたちはすごいです。

この3年を振り返ると、はじめは“個”の印象だった子ど

もたちが、このワークショップの中でつながっていくのが大きな変化の一つだったと感じています。「ハンカチ落としやりたい！」と、駄々をこねてくるようになったあの子が愛おしいなど、心から思います。私自身、今年の発表は大きなファミリーと一緒に演劇をつくっているような感じがしました。月1回くらいのペースで会いながら、楽しく安心して自分を表現していくことができる場。試行錯誤しながらでしたが、そういう場所をみんなとつくってこれたのではないかと思います。

子どもたちにとっては、このワークショップの時間はまだまだ人生の通過点。点と点がつながって線になっていきますように。





## 子どもたちの言葉

I feel shy  
because  
it's my first time.

(ダンス・中1)

とても楽しかったです。  
(ダンス・中1、小5、小1)

いろんな人がいて  
恥ずかしかつたけど  
楽しかった。

(演劇・小3)

全く知らない人といっぱい会えたり  
自分が知らない楽器もできて  
楽しかったですよ〜。

(音楽・中2)

少し緊張したけど  
発表できて良かったです。

(演劇・小3)

あまりやったことがない楽器も  
試すことができて  
とても楽しかったです。

(音楽・中2)

小さい子と親しめて  
良かったです。  
またやりたいと思います！

(演劇・小6)

鬼をするのが  
楽しかったです。

(ダンス・小3)

いろんな人がいては  
ずかしかつたけど  
たのしかった。



だいこんび



## 観客の言葉

参加した子どもたちのご家族

台詞の表現方法など考えるきっかけとなったのはもちろん、小さい子たちをまとめる大変さも経験できたようです。

みんなのチームワークが素晴らしかったです。また観たい気持ちになりました。優しい気持ちになりました。

楽しかったです。

演劇に興味が出てきた！

またこのような機会があれば、ぜひ参加させていただければと思います。

1回目から参加させていただきました。今回は集大成として素晴らしいステージだったと思います！

WAKUWAKU ネットワーク関係者

普段、飄々としていてクールな感じの子が、こんなに熱い思いを感じるとは…。

子どもたちのダンスが可愛らしくて楽しく、「ようかい」の世界へ遊びに行く不思議な世界観とマッチしていた。

人数が多くなってもまとまって頑張っていました。成長を感じます。

毎年演出の素晴らしさに感動しています。一人ひとりにスポットライトを当ててくださってありがとうございます。

昔、カーテンから半分しか姿を見せていなかった子が、台詞を言っているだけで感動しました！

普段サポートしている子どもたちの生き生きとした顔や助け合う姿が見られてとても良かった。継続して行って欲しいと思います。

毎年進化する様子が伺えたり、珍しい楽器演奏も楽しかった。

## おわりに

3年間を振り返ると、子どもたちとアーティストがつくり出した時間は、どの一瞬もかけがえのないものですが、それを見守っていた大人たちの「これはワークショップ始まっているんですか?」「これで発表大丈夫なんですか?」という言葉が懐かしく思い出されます。そして、必死でハンカチ落としゲームをし、休憩時間に学校や家であったことを我先にとアーティストに話しかけ、2時間も早く会場となる集会室に来てスタッフを困らせた、という、どちらかといえば本筋の周辺にあった子どもたちの姿を思い返しています。

それらはアートを介して彼らと出会えたから起こった出来事ですが、一見何もしていないように見えること、何かに向かってるように見えないことが、大切に愛おしく思えます。人と人につながりが生まれて、そこにいる人たちが居心地の良さを感じることができ、何をしているかよく分からなくても見守ってくれる人たちが周りにいる場所ができればそれで十分で、そこから先は集った人たちの想いが形になっていくのを、楽しく可笑しく思いながら眺めていました。



3年目、初めて2つのチームが交流した日。ある子が、知らない人が増えて警戒したのか部屋から出てしばらく廊下で過ごしていました。そのうち彼は、画用紙の上にペットボトルの水で水滴をつくり、そこに油性マジックの芯を浸すと色のかけらがモザイクのように水に浮くことを発見して教えてくれました。それはとても美しいものでした。彼はその間ワークショップを見ていなかったのも、お芝居の流れが分からなくなりましたが、交流を重ねる度に部屋の中にいる時間が増え、発表の直前にはアーティストに「言いたい台詞がある」と直訴したそうです。最後のシーンで、普段は特に仲

が良さそうには見えなかった子と一緒に、舞台袖で「3、2、1」と指折り数えて、「せーの」とその台詞を言いながら飛び出していった後ろ姿の美しかったことも目に焼き付いています。そうした小さな物語は、きっと私が気づいていない、見えていないところでも、参加した子どもたちや大人たち一人ひとりにあったのではないのでしょうか。

こうした取り組みを通して体感するのは、完璧な制度というものはいま実現しようがなく、隙間や境界で、どうしてもこぼれ落ちてしまうことがあります。人がいるということです。今回、学校や施設という枠組みが無いところからこそ出会えた子どもたちと過ごした時間は、手探りで試みを重ねながら、いま何が出来るかを考える時間でもありました。集まった子どもや大人と一緒に困って笑って、アートの力を借りて一つのものをつくり上げる。外から見ると一見何をしているか分からない時もあるし、私たちが確固とした未来が見えていたわけではないけれど、分からなさや曖昧さを楽しみながら、隙間で起こること、こぼれ落ちそうな、ささやかな出来事を受け止められる場所が必要だったのかな、と思います。

最後になりましたが、そんな場所に通い続けてくれた子どもたち、アーティスト、あたたかく見守ってくださった保護者や関係者の皆様に、この場を借りて改めてお礼申し上げます。



芸術家と子どもたち  
事務局長 中西麻友

私たちの活動に賛同し、協賛・助成・寄付といった形で支援していただける企業・財団・個人の方をお待ちしています。ご関心をお持ちの方は、ぜひ事務局までお問い合わせください。

NPO 法人芸術家と子どもたち 事務局

TEL : 03-5906-5705 FAX : 03-5906-5706 mail : mail@children-art.net

HP : <https://www.children-art.net/>



発行日：令和5年3月1日

発行者：特定非営利活動法人 芸術家と子どもたち

編集・デザイン：ムラハタワークス

※無断転載・複製を禁ず。

